

徳島大学教養部紀要

(人文・社会科学)

第二十一卷 別刷

1986

ハルトマン・フォン・アウエの「イーヴァイン」

石 川 栄 作

ハルトマン・フォン・アウエの「イーヴァイン」

石川 栄 作

Iwein Hartmanns von Aue

Eisaku ISHIKAWA

Zusammenfassung

In Hartmanns *Iwein* spielt König Artus, der jeden Eid auf genaueste erfüllt, eine wichtige Rolle. Durch das Motiv „Eid“ sind König Artus und Iwein aufeinander bezogen. Hauptsächlich dieses Eid-Motiv behandelnd, möchten wir hier Iweins *âventiuren* verfolgen, um die Eigenschaft des Werks aufzuhellen.

Iwein gewinnt zuerst die Königin Laudine und ihr Land, *minne* und *êre*, indem er das Quellenabenteuer bestanden hat. Gawein deutet aber an, Iweins Ehre sei scheinbar vergänglich und gefährdet. Auf den Rat Gaweins bittet Iwein seine Gemahlin um Erlaubnis, sich zum Turnieren fort zu begeben. Laudine erlaubt ihm, für ein ganzes Jahr fortzureiten. Dabei geht es darum, daß er *swuor* (2929), schon eher zurückzukommen. Trotzdem *vergaz* er *der jârzal* (3055) und *versaz sin gelûbede* (3056). Er ist schon außerhalb der höfischen Gesellschaft, als Lunete ihn vor der Zeugenschaft des Artushofes verflucht: er ist *ein verrâtære* (3118) und *ein triuwelôser man* (3183).

Er muß nun nackt und verrückt sein, bis er eines Tages mit der Salbe erwacht. Sein Erwachen ist keine bloße Episode, sondern ein entscheidender Prozeß jenes *sælden wec*, der für den Artusroman wesentlich ist. Er findet nämlich einen neuen ritterlichen Weg. Der neue Weg Iweins besteht aus 6 *âventiuren*, wo er gerade umgekehrt wie zuvor handelt. Iweins 6 *âventiuren* sind ausnahmslos Befreiungshandlungen, Erlösungsakte für bedrängte und schutzlose Leute. Im Gegensatz zum Quellenabenteuer ist er diesmal in der Rolle des Verteidigers, nicht des unrechtmäßigen Angreifers. Zuvor hatte er *êre* hochmütig erringen wollen, deshalb mußte er scheitern. Auf 6 *âventiuren* nun geht er als ein namenloser *riter mitem lewen* den Weg der rechten Ordnung, durch selbstlose Handlungen *triuwe* und *erbermde* zu zeigen, deshalb ist er nunmehr berechtigt, im zweiten Quellenabenteuer Laudines Liebe zu erhalten.

Im zweiten Quellenabenteuer, das den Kontrast zu dem ersten bildet, geht es wieder um das Eid-Motiv. *Eit* ist hier ein Schlüssel zur *suone* der beiden. Dazu hat auch Lunete mit treuem Dienst beigetragen, wie sie zuvor es ihm gelobt hatte.

Iweins neuer Weg der 6 *âventiuren* ist also zugleich der Weg zu Laudine zurück, dadurch nämlich, daß Iwein in seinen ritterlichen Taten *triuwe* und *erbermde* beweist, in deren Mangel Iweins Schuld bestand. Gott schenkt nun ihm *sælde* und *êre* (3), weil er *an rehte gûete* (1), d.h. *triuwe* und *erbermde, sin gemûete wendet* (2). Die *triuwe* und *erbermde*, die im *Armen Heinrich* innerlich beobachtet worden war, hat Hartmann hier in *Iwein*, Eid-Motiv ordnungsmäßig in das Werk einflechtend, ritterlich idealisiert. Hier ist die Eigenschaft des Werks zu erkennen. Das ritterliche Ideal, das Hartmann im voraus in *Erec* gezeigt hatte, ist durch die innerlichen Prozesse *Gregorius* und *den Armen Heinrich* schließlich in *Iwein* verwirklicht worden.

序

ハルトマン・フォン・アウエの四つの叙事詩の中で最後の作と考えられる「イーヴァイン」は、フランスのクレチアン・ド・トロアの作品「イヴァン」を翻案したものであり¹⁾、彼の最初の叙事詩「エーレク」と同じように典型的なアルトゥース・ローマンである²⁾。そこに展開された世界はアルトゥース宮廷騎士社会であり、その社会を背景にして繰り広げられる物語は、「エーレク」と同じようにミネと騎士道の調和を求めての主人公イーヴァインの冒険の物語である。ところが、「エーレク」においてアルトゥース王は宮廷のいわば象徴的存在であって、物語の主人公としての役割は演じていないのに対して、この「イーヴァイン」の作品においてはあらずじの転換に大きくて重要な役割を果たしていると言わなければならない。なぜなら、アルトゥース王が聖霊降臨祭でカーログレナントの冒険譚を聞いて泉の国へ出かける誓いをしたことから、この物語は大きく展開してゆくのであり、またこの作品における最後で最大の冒険とも言うべきイーヴァインとガーヴァインとの決闘、すなわちシュヴァルツ・ドルン伯の娘たちの遺産相続問題においては、アルトゥース王の裁きが非常に重要な役割を演じているからである。物語は確かに主人公イーヴァインとラウディーネをめぐる展開するが、しかしその中にアルトゥース王の役割も整然と織り込まれていると言っても過言ではないのである。アルトゥース王の役割の重要性を表わすものとしてアルトゥース王妃誘拐の挿話を指摘することもできよう。この挿話は、ただ単にガーヴァインがアルトゥース王の宮廷を留守にしていたというためのものであり、直接的に大きく物語のあらずじに影響を与えるものではない。それにもかかわらず、詩人ハルトマンは、クレチアンのほんの22行だけのこの挿話をおよそ200行にも及ぶ小話にまで拡大しているのである³⁾。ガーヴァインの義兄である城主によってイーヴァインに語られるこの挿話は、本稿で再三再四必要となってくるので、ここでその内容をあらかじめ検討しておこう。

まずその城主の話すところによると、気前よく立派な(4539)アルトゥース王の噂を聞いたあ一人の騎士が、王から贈り物を一つもらおうと思ってアルトゥース宮廷にやって来たときのこと、その騎士の願いを聞いたアルトゥース王は、ふさわしいことであればどんなことでも叶えてあげようと答えたのに対して、その騎士は条件をつけるならお願いなどはしないという態度に出たのである。アルトゥース王はそれを一度拒否はしたものの、腹を立てて立ち去ったその騎士の悪態に名誉が失なわれてしまうことを恐れた円卓の騎士たちの進言によって、考えなおしてその騎士の願いを叶えてやることになるのである。この場面を詩人ハルトマンは城主にこう語らせている。

- 1) Vgl. Peter WAPNEWSKI: Hartmann von Aue. 7., ergänzte Auflage. (Sammlung Metzler Band 17) J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung Stuttgart 1979. S. 69-70.
- 2) アルトゥース・ローマンについては「ハルトマン作品集」(郁文堂、1982年)における中島悠爾氏の解説(417-421頁)を参照のこと。
- 3) P. WAPNEWSKI: a. a. O., S. 72.

Der künec sich dô bedâhte
 und schuof daz man in brâhte,
 und gelobet im des stæte,
 ze leistenne swes er bæte.
 ouchn bedorfter mêre sicherheit:
 wan *sîn wort daz was ein eit.*
 dô bat er als ein vrâvel man
 daz er müese vüeren dan
 sîn wîp die küneginne.
 daz hæte die sinne
 dem küneger vil nâch benomen.
 er sprach 'wie bin ich überkomen!
 die disen rât tâten,
 die hânt mich verrâten.' (4579-92)

そこで王は考え直され、
 その騎士を連れ戻されて、
 彼が願うことは何でも叶えてあげよう
 と固く約束されました。
 騎士もそれ以上の保証を要求しませんでした。
 なぜなら、王の言葉は誓いだったからです。
 ところが、この厚かましい男は、
 王の奥方であられる王妃を
 連れ去りたいと願い出たのです。
 それを聞いて王は
 ほとんど正気を失われんばかりでした。
 王は言われました。「私は見事に騙された。
 こんな忠告をした者たちは、
 私を裏切ったのだ。」

こうして王妃はその騎士によって連れ去られ、アルトゥース騎士たちがそれを追って出かけるのであるが、この挿話から言えるのは、アルトゥース王の言葉は誓い (eit, 4584) であり、それはいかなる場合にも取り消すことはできないということである。この挿話はハルトマンの創作部分と言ってもよいだけに、アルトゥース王の誓いが詩人ハルトマンにとってこの作品の中ではいかに重要であったかが容易に窺えよう。

プロローグにおいても詩人ハルトマンはアルトゥース王について褒め称えているが、そのプロローグの最後にはこう語られている。

er ist lasterlicher schame
 iemer vil gar erwert,
 der noch nâch sinem site vert. (18-20)

王を模範として行動する者は、
 惨めな恥を受けることは
 決してないのである。

この作品の中ではアルトゥース王が模範であり、王のように行動すべきであると語られているが、しかし主人公イーヴァインはこの作品の前半においてその模範に反する行動をするのである。すなわち、イーヴァインは妻ラウディーネとの誓約を破ってしまうのである。従って、H. ツットが述べているように、アルトゥース王とイーヴァインは誓いのモチーフという点で結びついており⁴⁾、その誓いを守らないことからイーヴァインの本来の冒険の物語が始まるのである。そこで本稿では、この誓いというモチーフを中心にして、主人公イーヴァインの歩んだ道を進むことによって、この作品の特質を探り出すことにしたい。

4) Herta ZUTT: König Artus — Iwein — Der Löwe. Die Bedeutung des gesprochenen Wortes in Hartmanns »Iwein«. Max Niemeyer Verlag Tübingen 1979. S. 4-31. なお、本稿はこの H. ツットの著書から多くの示唆を得たことを付記しておきたい。

I. 泉の国への冒険とイーヴァイン —— *gelübede versitzen* と *untriuwe* ——

物語はまず、ある年の聖霊降臨祭にアルトゥース王がカリドールの城で催した豪華な祝宴で、円卓の騎士の一人カーログレナントが仲間たちに自分の失敗談を物語るところから始まる。カーログレナントは、要するに、およそ十年前に冒険を求めて (*nâch âventiure*, 261) ブレスィリヤーンの森に出かけて、泉の国の城主と戦って恥をかいたことを居並ぶ騎士たちに語って聞かせたのである。この話を聞いてカーログレナントの従兄弟のイーヴァインがその恥辱の復讐をしてやる (806-7) ことを口にする、同席のカイイがイーヴァインの大言壮語を罵り始めて、いろいろな嘲りの言葉が交わされる。そこへ今まで休んでいたアルトゥース王が姿を現わし、カーログレナントの失敗談の内容を王妃の口から伝え聞くと、十四日後の聖ヨハネ祭の夜に軍勢を残らず引き連れて泉の国へ赴くことを直ちに誓い (*swuor*, 898)、その誓約を布告するように命じた (899) わけであるが、この誓いこそこの物語のあらすじを動かす重要なモチーフであることはすでに序でも述べた通りである。この誓いのモチーフの重要性を詩人ハルトマンはその聴衆にきわだたせるために、そのアルトゥース王の誓い (898) の直前に次のように語っているが、これはクレチアンの作品には見られない言葉である⁵⁾。

Nû hete der kûnec die gewonheit	さて王は、父王の魂にかけて
daz er nimmer deheinen eit	誓ったことならば、
bî sînes vater sêle swuor	どんな誓いでも
wan des er benamen volvuor. (893-6)	必ず実行することにしていた。

誓いを守ることはアルトゥース王にとって「習慣」(*gewonheit*, 893) であり、誓いによって成立した義務の遂行は彼にとって規範であることがこの記述から明らかである⁶⁾。従って、アルトゥース王が泉の国へ出かけることを誓った (*swuor*, 898) という事は、十四日後の行動が示されているだけではなく、それと同時に価値体系に関係づけられてもいるのである⁷⁾。この誓いは、すなわち、泉の冒険 (*âventiure*) を繰り返すことでもってカーログレナントの恥辱の復讐をして騎士としての名誉を回復することを意味していると言えるのである。居並ぶ騎士たちはこの王の誓いを聞いたとき、騎士らしくて立派なこと (*rîterlich und guot*, 905) だと思った。彼らは全員そこへ行こうと思っていたからである。ところが、この物語の主人公イーヴァインだけはそれを快く思わなかったが、それは勿論、泉の冒険を繰り返すことで騎士の名誉を取り戻すことに反対したということでは決してなく、イーヴァインはただ一人でそこへ行こうと思っていた (909-10) し、また実際それをすでに騎士たちの前で口にしていた (805-9) からである。そこで彼は、王自身が行かれるつもりならば、イーヴァインも同行することだろうから、自分が騎士として名

5) Ebd., S. 7-8.

6) Ebd., S. 8.

7) Vgl. ebd., S. 7.

をあげる機会はなくなるだろう (911-8) と思って、一人こっそりと立ち去り、王たちよりも早く泉の国へ出かけて行くのである。

十年前にカーログレナントが経験した泉の国への冒険は、実に500行以上も費やされて長々と(259-802)語られているのであるが、これを単なる「前話」として片づけるわけにはいかない。カーログレナントの冒険は、イーヴァインの泉の冒険の性格をまず大きく規定し、同時に、アルトゥース宮廷と泉の国の間で展開されるこの不思議な物語全編に、基本的様式を与える、礎石のような役割を果たすもの⁸⁾だからである。カーログレナントの辿ったそれと全く同じ径をイーヴァインは進み、同じ体験を重ねる⁹⁾。両者の冒険の一致している限り、作者は重複を避けて、イーヴァインの冒険を詳説してはいない¹⁰⁾。泉の国に着いて不思議な石に水を注ぐまではほんの30数行で済まされているのである。しかし、そのあと馬に乗って現われたアスカローン王との決闘は、多くの詩行を費して詳述されている。この決闘はカーログレナントの場合とは異なるからである。激しい決闘ののちついにイーヴァインがこの国の城主アスカローン王の兜を通して命に関わる一撃を与えると、その城主はやむなく馬の向きを変えて逃げ出した。ケイイの皮肉に満ちた罵りを恐れたイーヴァインは、騎士の心得も忘れて (*âne zuht*, 1056) 城主を城にまで追い込んで、さらに新たな致命傷を加えたが、しかし、城門に仕掛けられてあった二つの落とし格子の間に閉じ込められる結果となったのである。どうしたものかと考えていると、ほどなく彼のそばで小さな戸が開けられ、この国の王妃の侍女でルネーテという乙女が入って来たが、彼女の話によると、致命傷の城主はついに死んでしまい、その王妃ラウディーネと家来たちは激しい憤りでいっばいだと言う。この乙女にとってもイーヴァインの行為はつらいものであったが、かつてブリタニエの国でイーヴァインから敬意を払ってもらったことがあったので、彼を憎むことのできないその乙女は、不思議な指輪を与えてイーヴァインの身を護るのである。これを持っている限りは誰にも姿が見えなくなるというこの指輪のおかげで、イーヴァインは敵の仕返しを受けずに済むのであるが、しかしのちにその城主の妻から別の方法で復讐されることとなる。すなわち、城主を悼み嘆く王妃ラウディーネの美しい姿に心を奪われたイーヴァインは、ミンネの一撃によって大きな痛手を受けるのである。ミンネによる復讐を詩人ハルトマンはこのように語っている。

si bestuont in mit überkraft,
und twanc in des ir meisterschaft
daz er herzeminne
truoc sîner viendinne,
diu im ze tôde was gehaz.

ミンネ夫人は強い力を持って彼に襲いかかり、
その力で彼を強要して、
自分を死ぬほど憎んでいる
敵の女性に対して
心からの愛を抱かずにおれなくした。

8) 平尾浩三：“The Lady of the Fountain” (Mabinogi), “Yvain” (Chrestien), “Iwein” (Hartmann) —— 冒頭の Artushof および Kalogrenants aventure をめぐる Streifzüge —— 東京大学教養学部教養学科紀要9号1976年39頁。

9) 同上論文39頁。

10) 同上論文39頁。

ouch wart diu vrouwe an im baz
gerochen danne ir wære kunt:
wan er was toetlichen wunt.
die wunden sluoc der Minnen hant.
ez ist der wunden alsô gewant,
sî wellent daz sî langer swer
dan diu von swerte ode von sper:
wan swer von wâfen wirt wunt,
der wirt schiere gesunt,
ist er sînem arzte bî:
und wellent daz disiu wunde sî
bî ir arzte der tôt
unde ein wahsendiu nôt. (1539-56)

王妃も彼に対して
想像以上に見事に復讐をしたわけである。
彼は致命傷を負ったのだから。
その傷はミネ夫人の手が負わせたのである。
このような愛の傷は、
剣や槍で受けた傷よりも
長く痛むという性質を持っている。
武器で傷つけられた者は、
その医者にかかれば、
すぐに健康になるが、
この愛の傷というものは
その医者のそばにいと命とりとなり、
いちだんと痛みがつのるものだからである。

その後も一層彼女への愛に燃えたイーヴァインの苦しみは、要するに、ラウディーネの夫アスカロン王を殺したことに端を発している。アスカロン王を殺すことによって彼は冒険を成功のうちに取りめたが、宮廷に帰ってそれを証明できなければ彼の名誉は失なわれる (1726-9)。しかし、立ち去ってその夫人の姿を見ることができないくらいなら名誉などどうでもよい (1731-7)。と言つて、ここに留まっても夫殺害ゆえに彼女の恩寵は得られまい (1618-20)。名誉とミネの二つがこのように彼を悩ませたのである。イーヴァインの苦悩を賢明にも理解した侍女のルネーテは、イーヴァインがこの国の主君になってくれることを切望していた (1786-7) ので、すぐさま王妃のところへ出かけて行って、このように進言するのである。

'iu sî doch ein dinc gesaget,
daz man iedoch bedenken sol,
ir vervâhertz übel ode wol.
ezn ist iu niender sô gewant,
irn wellet iuwern brunnen und daz
und iuwer êre verliesen, [lant
sô müezet ir etewen kieser
der iun vriste unde bewar.
manec vrum rîter kumt noch dar
der iuch des brunnen behert,
enist dâ nieman der in wert.' (1820-30)

「王妃様に一つだけ申し上げたいのですが、
あなたはそれをどう思われましようとも、
これだけはどうかよくお考え下さい。
あなたは、あなたの泉と国と
名誉とを失いたくなければ、
あなたを助けてこれらを護ってくれる人を
誰か選び出さねばならぬ
お立場にいらっしゃるのです。
もし泉を護る人が誰もいなければ、
これからも多くの強い騎士が
あなたの泉を荒らしにやって来るでしょう。」

実際十二日後にはアルトゥース王が軍勢を率いてやって来るという使者の報告を知らせたあと、さらにルネーテは、アスカロン王より優れた騎士は多数いることを口にして王妃を説得し続けたのである。王を殺した騎士の方が強いのは事実であるというこの侍女の言葉に王妃の心は痛み、怒って侍女に直ちに立ち去るようにと命じたが、不実な心を持って留まるよりは、忠実な気持の

ために追われる方がずっとよいと考えた侍女は、さらに王妃によく考えるようにと進言してその場を立ち去った。侍女を追い出して一人きりになった王妃は、侍女の自分への厚い忠誠心に対して、ひどい仕打ちをしたことを大変後悔して、こう考えなおすのである。

'mîn herre was biderbe genuoc:	「私の夫はとても立派な人でしたが、
aber jener der in dâ sluoc,	しかし夫を倒した人の方が
der muose tiurre sîn dan er:	夫より優れているに違いないのです。
erne het in anders her	そうでなければ、その人は夫をここまで
mit gewalte niht gejaget.	力づくで追い詰めることはできなかったでしょう。
sî hât mir dar an wâr gesaget.	その点で侍女の言ったことは本当だわ。
Swer er ist der in sluoc,	夫を打ち倒した人が誰であれ、
wider den hân ich schulde gnuoc	私その人を憎んだことには、
daz ich im vîent sî:	十分理由があります。
ouch stât unschulde dâ bi,	けれども事態を正しく理解すれば、
der ez rehte wil verstân:	その人には何の罪もありません。
er hât ez werende getân.	その人は身を守るためにそうしたのですから。
mîn herre wolt in hân erslagen:	私の夫は彼を打ち殺そうとしていたのですもの。
heter im daz durch mich vertragen	もしもその人が私のためにそれに甘んじて、
und het in lâzen genesen,	夫を生かしておいたとしたら、
sô wær ich im ze liep gewesen:	私はその人の好意に甘え過ぎることになります。
wan sô wærer selbe tôt.	そうすればその人の方が命を失っていたでしょうから。
daz er in sluoc, des gie im nôt.	その人が夫を殺したのは、止むを得なかったのです。」

(2033-50)

このように彼女は心の中で気持をおさめて、イーヴァインを彼女に対して罪なし (unschult, 2053) と判断したあと、この国を護ってくれる立派な男性はほかならぬ主人を打ち倒した騎士でなければならぬという決断を下すのである。夫を殺害された妻が直ちに殺害者と結婚するということは、当時の宮廷道徳からすると、誠実さ (triuwe) というものへのひどい違反であったと考えられよう¹¹⁾。冷笑的に嘲笑的に、容赦なく笑いものにしながら婦人とその誠実さについて意見を述べることによって、その扱いにくい問題をうまく扱っているクレチアン¹²⁾ に対して、ハルトマンは女性の善良さ (güete, 1878) を挙げて次のように説明することによってラウディーネの心変わりをあらかじめ弁護しているのである。

daz sî sô dicke brechent	女性たちは拒絶したことを
diu dinc diu sî versprechent,	のちに受け入れることがよくある、
dâ schiltet sî vil maneger mite:	と女性を多くの人非難するが、
sô dunketz mich ein guot site.	私にはそれは良い性質だと思われる。

11) P. WAPNEWSKI: a. a. O., S. 78.

12) Ebd.

er missetuot, der daz seit,
 ez mache ir unstætekheit:
 ich weiz baz wâ vonz geschiht
 daz man sî alsô dicke siht
 in wankelm gemüete:
 ez kumt von ir *güete*.
 man mac sus übel gemüete
 wol bekêren ze *güete*
 unde niht von *guote*
 bringen ze *übelem muote*.
 diu wandelunge diu ist *guot*:
 ir deheiniu ouch anders niht entuot.
 swer in danne unstæte giht,
 des volgære enbin ich niht:
 ich wil in niuwan *guotes jehen*.
 allez *guot müez* in geschehen.

(1869-88)

女性の移り気がそうさせるのだ、
 と言う人は間違っているのである。
 女性の気持ちが揺れ動くのが
 よく見られるのはなぜなのか、
 そのことについては私の方がよく知っている。
 それは女性たちが善良だからである。
 このように女性の間違った考えを
 良い方へ向けることはできても、
 良い考えから
 悪い方へと向けることはできないのである。
 このように考えを変えられることは良いことである。
 どんな女性も必ずそうするであろう。
 それでも女性は不実だという人には、
 私は同意することができない。
 私は女性に良い面だけを認めたい。
 女性たちに幸多きことを祈りたい。

そしてさらに王妃の即座の心変わりを弁護するために、詩人ハルトマンは、——これもクレチアンの作品には見られない記述であるが——強力な愛の女神 (diu gewaltige Minne)、あの男女の仲を取り持つ真の仲介者がそこに介在していたのである (2054-7) と語っているのである¹³⁾。当時の宮廷道徳では、女性から男性に求婚するのは慎みのないこととされていたけれども、詩人ハルトマンはあえてそのことをラウディーネに語らせつつ二人を結びつけるのである。

'her Iwein, niene verdenket mich,
 daz ichz von unstæte tuo,
 daz ich iuwer alsô vruo
 gnâde gevangen hân.

(2300-3)

...
 sîr ir mînen herren hânt erslagen,
 sô sîr ir wol ein sô vrum man,
 ob mir iuwer got gan,
 sô bin ich wol mit iu bewart
 vor aller vremder hôchvart.
 und geloubet mir ein mære:
 ê ich iuwer enbære,
 ich bræche ê der wibe site:
 swie selten wîp mannes bite,
 ich bæte iuwer ê.

「イーヴァイン様、私があなたをこんなに早く
 許したということを、
 私に操がないためだなどと
 悪く取らないで下さい。

...

あなたは私の夫を倒したのですから、
 きっととても勇敢な方でしょう。
 もし神様が私にあなたをお与え下さるなら、
 私はあなたによって
 どんな異国の傲慢な侵入からも護られるでしょう。
 そして一つだけ信じて下さい。
 私はあなたを諦めるくらいなら、
 むしろ女性の慎みを破ってもいいのです。
 つまり、女性は男性に求婚するものではなくても、
 それでも私はあなたに求婚したいのです。

13) 相良守峯：ドイツ中世叙事詩研究 (富士出版株式会社1948年、郁文堂1960年) 404-6頁参照。

ichn noetliche iu niht mê:
 ich wil iuch gerne: welt ir mich?'
 'spræch ich nû, vrouwe, nein ich,
 sô wær ich ein unsælec man.
 der liebste tac den ich ie gewan,
 der ist mir hiute widervarn.
 got ruoche mir daz heil bewarn,
 daz wir gesellen müezen sîn.'
 sô sprach diu künegin
 'Oowi, mîn her Îwein,
 wer hât under uns zwein
 gevüegeet dise minne?
 es wundert mîne sinne,
 wer iu geriete disen wân,
 sô leide als ir mir hât getân,
 daz ich immer wurde iuwer wîp.'
 'mir rietz niuwan mîn selbes lîp.'
 'wer rietz dem lîbe durch got?'
 'daz tete des herzen gebot.'
 'nû aber dem herzen wer?'
 'dem rieten aber diu ougen her.'
 'wer riet ez den ougen dô?'
 'ein rât, des muget ir wesen vrô,
 iuwer schœne und anders niht.'

(2322-55)

私はもうあなたの敵ではありません。私はあなたを
 夫にしたいのです。あなたはいかがですか。」
 「王妃様、もし私が今、いいえと言えば、
 私は不幸な男となるでしょう。
 私がこれまで過ごした一番素晴らしい日、
 それは今日のこの日です。
 神様が私のこの幸せをお守り下さり、
 私たちが愛し合ってゆけますように。」
 そこで王妃が言った。
 「ああ、イーヴァイン様、
 私たち二人の間にこんな愛を
 芽生えさせたのは誰なのでしょう。
 私は不思議に思います。
 あなたは私にあれほどの苦しみを与えながら、
 私がいつかあなたの妻になるなどということ、
 誰があなたに考えつかせたのでしょうか。」
 「それはほかでもない私自身です。」
 「誰が一体あなた自身にそうさせたのでしょうか。」
 「それは心が命じたのです。」
 「だけど、その心には誰が命じたのでしょうか。」
 「そうしたのは目です。」
 「では誰がそれを目に命じたのかしら。」
 「それは、あなたが喜んでよい一人の忠告者、
 即ち、あなたの美しさ以外の何者でもありません。」

こうして二人はミネで結ばれ、手を取り合って宮殿の中に入っていくと、立派な騎士イーヴァインは家来たちからも歓迎されてこの国の主人になることとなったのである。早速華やかな結婚の祝宴が執り行なわれ、その際催された槍試合も、アルトゥース王が誓い通り (alser swuor, 2448) 軍勢を連れてこの泉の国へ来るまで続いたのである。

さて、アルトゥース王の一行が到着して、今や泉の国の城主であるイーヴァインが武装して城から出て来ると、決闘の相手はカイイであった。イーヴァインは、どんな良いことでも悪くしてしまうあのカイイが相手であるのを知って、この機会に日頃の罵りの仇を取る許しを与えてくれたことを神に感謝した。戦いはイーヴァインの誉れとカイイの恥辱に終わり、アルトゥース王の前に現われるとイーヴァインは自らの名を名のったあと、この国の城主になった経緯を物語った。居合わせた騎士たちは皆、イーヴァインが泉の国と名誉を得たのを見て喜んだ。アルトゥース王はイーヴァインの願いに応じて、彼の城へ行って、王妃から大歓迎を受けるのであるが、王妃にしてみても夫のお陰でアルトゥース王に会うことも叶い、自分の選択が正しかったことを悟った

のである。こうしてイーヴァインは冒険とミネの二つを見事に克服して騎士としてこの上ない
 誉れ (êre) を得たかに見えたが、しかし親友のガーヴァインの忠告によると、その名誉 (êre) は
 束の間のものであり、危険に晒されていることがほのめかされる¹⁴⁾。泉の国に一週間滞在し、や
 がて出発の時が来たとき、誠実な人ガーヴァインはイーヴァインを人々から離れたところに導い
 て、こう忠告するのである。

'nû ist iuwer arbeit
 sæleclîchen an geleit:
 iu hât erworben iuwer hant
 ein schœne wîp unde ein lant.
 sît iu nû wol geschehen sî,
 sô bewaret daz dâ bî
 daz iuch iht gehœne
 iuwers wîbes schœne.
 geselle, behûetet daz enzît
 daz ir iht in ir schulden sît
 die des werdent gezigen
 daz sî sich durch ir wîp verligen.
 kêrt ez niht allez an gemach;
 als dem hern Êrecke geschach,
 der sich ouch alsô manegen tac
 durch vrouwen Ênîten verlac.
 wan daz er sichs erholte
 sît als ein rîter solte,
 sô wære vervarn sîn êre.
 der minnete ze sêre.
 Ir hât des iuch genüegen sol:
 dar under lêr ich iuch wol
 iuwer êre bewarn.
 ir sult mit uns von hinnen varn:
 wir suln turnieren als ê.
 ...

(2779-2803)

Ir hât alsô gelebet unz her
 daz ichs an iu niht wandel ger,
 nâch êren als ein guot kneht:
 nû hât ir des êrste reht
 daz sich iuwer êre
 breite unde mêre.

(2899-2904)

「今や君の骨折りは
 よい成果を収めました。
 君は自分で
 美しい奥方と領国とを勝ち取りました。
 今君に幸運が訪れたのだから、
 君の奥方の美しさのために
 名誉を失うことのないように
 気をつけてくれ給え。友よ、
 君には手遅れにならないうちに注意してほしいのだ。
 妻のために安逸に流れた生活をする、
 と非難される人々と
 同じ誤ちを犯さないようにしてくれ給え。
 ちょうど妻エーニーテのために
 あれほど多くの時を
 無為に過ごしたエーレクのように、
 安楽な生活だけに心を向けてはいけないのだ。
 もし彼がのちに騎士にふさわしく
 心を入れ替えなかったら、
 彼の名誉は失なわれていたことだろう。
 彼は愛に溺れ過ぎたのだ。
 君は満足していいほどのものを持ってはいるけれども、
 私は君に、その名誉を
 維持する方法を教えてあげよう。
 君は我々と一緒にここを去るべきだ。
 我々は今までのように槍試合をすべきなのだ。
 ...
 君はこれまで、立派な騎士らしく
 名誉を心がけて暮らしてきたが、
 私は君にそれを変えてほしくはないのだ。
 今こそ君は
 君の名誉を
 広め増やすべきなのだ。」

14) Thomas CRAMER: *Sælde und êre* in Hartmanns *Iwein*. Euphorion 60, 1966. S. 33.

クレチアンの58行に対してハルトマンでは149行もの量にまで拡大されている¹⁵⁾ このガーヴァインの忠告は、要するに、妻の愛に溺れて騎士の名誉を失ったエーレクを引き合いに出して、得られた名誉を維持し長続きさせるためには新たな騎士としての修業を怠るべきではないことをイーヴァインに論ずるのである。これに対するイーヴァインの返事は詩人ハルトマンによってテキストの中には取り入れられておらず¹⁶⁾ イーヴァインはガーヴァインの忠告をすぐさま行為へと置き換えている¹⁷⁾ が、このことは、イーヴァインとガーヴァインが同じ意見を持っており、騎士的価値観とそこから結果として生ずる義務について同じ理解を持っている¹⁸⁾ ということを表わしていると言えよう。イーヴァインは直ちに妻の了解を求め、賛成を得るのであるが、この場面で重要なことは王妃誘拐の挿話が想起される¹⁹⁾ ということである。

wan dô sîn bete was getân,
done hete sî des deheinen wân
daz er sî ihtes bæte
wan daz sî gerne tæte.
daz geweren rou sî dâ ze stat,
dô er sî urloubes bat
daz er turnieren müese varn.
sî sprach 'daz sold ich ê bewarn':
done mohte sis niht wider komen.

彼が頼んだとき、
彼女は、彼女が喜ぶ以外のことを
彼が頼むなどとは
思いもよらなかった。
彼が槍試合の修行に行く
許可を乞うたとき、
彼はすぐ賛成したことを後悔した。
彼女は言った。「私は前もって気をつけるべきでした。」
しかし、もう取り返しはつかなかった。

(2915-23)

何の制限もなしにイーヴァインの望みを承諾したラウディーネは、ちょうどアルトゥース王がある騎士に対して認めたと同じように、たとえ夫の望みが自分にとってふさわしくないものだとしても、それを叶えてあげなければならないのである。こうしてイーヴァインはまる一年の間国を留守にする許しを得たのであるが、この際重要なことは二人が誓い (swern) を交わしたということである。まずラウディーネは、もし夫が一年以上長く留守にしたら永遠に夫を憎むと誓い (swuor, 2926)、続いてイーヴァインも、妻を愛するあまり一年は長過ぎると思ったので、それ以上長くは留守にしないことを誓った (swuor, 2929) のである。この誓約 (swern) によってイーヴァインとラウディーネにはそれぞれ義務が課せられたと言えるのである。この義務を果たさなければ、相手によってばかりではなく、社会の制裁も加えられる²⁰⁾ のである。ラウディーネも実際、この期限を守らないことがもたらす国の名誉の危機を夫にこう警告しているのである。

15) H. ZUTT: a. a. O., S. 40.

16) Ebd., S. 44.

17) Ebd.

18) Ebd.

19) Ebd., S. 16-17.

20) Ebd., S. 19.

Sî sprach 'iu ist daz wol erkant
 daz unser êre und unser lant
 vil gar ûf der wâge lit,
 ir enkumt uns wider enzît,
 daz ez uns wol geschaden mac.
 hiute ist der ahte tac
 nâch den sunewenden:
 dâ sol daz jârzil enden.
 sô kumt benamen ode ê,
 ode ichn warte iuwer niht mē.
 unde lât diz vingerlîn
 einen geziuc der rede sîn.' (2935-46)

彼女は言った。「あなたにはよくお分かりのように、
 私たちの名誉と国は
 大変危険な状態にあります。
 あなたが期限通り帰って下さらなかったら、
 私たちにはきっと不幸が起こります。
 今日夏至から数えて
 八日目です。
 この日で一年の期限が切れることにしましょう。
 期限通りあるいはそれ以前に戻って来て下さい。
 私はあなたをそれ以上はお待ち致しません。
 この指輪を
 そのお約束の証としましょう。」

妖精の国とその伝説²¹⁾を思わせる場面であるが、こうしてイーヴァインは妻より指輪を受け取って、アルトゥース王の一行に加わって旅に出かけたのである。

ところが、イーヴァインは騎士の修行に熱中しているうちに一年の期限を忘れてしまい (der jârzal vergaz, 3055)、妻との誓約をないがしろにしてしまう (sîn gelübede versaz, 3056)。約束の期限も大部過ぎて、アルトゥース王のカリドールの城でそのことに思い至ったときにはもはや遅過ぎた。妻の侍女のルネーテがやって来て、アルトゥース王とその騎士たちの前で、イーヴァインが誓いを破った裏切り者 (verrâtære, 3118) であり、不誠実な (triuwelôs, 3183) 者であることをはっきりと言い渡すのである。

'Künec Artûs, mich hât gesant
 mîn vrouwe her in iuwer lant:
 unde daz gebôt sî mir
 daz ich iuch gruozte von ir,
 und iuwer gesellen über al;
 wan einen: der ist ûz der zal:
 der sol iu sîn unmære
 als ein verrâtære.
 daz ist hie der her îwein,
 der niender in den siten schein,
 dô ich in von êrste sach,
 daz untriuwe ode ungemach
 ieman von im geschæhe
 dem er triuwen verjæhe.
 sîniu wort diu sint guot:
 von den scheidet sich der muot.
 ... (3111-26)

「アルトゥース王様、私を
 あなたの国に遣わされたのは私の王妃様です。
 そしてあなた様とあなた様のお仲間の方たちに
 王妃様からの御挨拶を
 お伝えするようにとのこととございます。
 ただ一人の方だけは、その数には入っておりません。
 その人は裏切り者で
 あなたに背く人です。
 それはここにおいでイーヴァイン様です。
 私が初めて会ったときには、
 この人は、誠実を誓った相手を
 不誠実なあるいは不愉快な目に
 会わせたりするようなお方には、
 決して見えなかったのですが。
 彼は言葉では親切です。
 しかし言葉と心持ちは別なのです。
 ...

21) Vgl. P. WAPNEWSKI: a. a. O., S. 68-69.

Nû tuon ich disen herren kunt	さて、私はここにおいでの皆様は、
daz sî iuch haben vür dise stunt	今後はあなたイーヴァイン様のことを
vür <i>einen triuwelösen man</i>	不誠実の人だと思って頂きましょう。
(dâ ir wurdet, da was ich an	(あなたイーヴァイン様の不誠実のために、
ensament meineide	私も偽誓をすると同時に
und triuwelôs beide); [schamen,	不誠実となりました。)
und mac sich der künec iemer	王様は誠実と名誉を重んじているだけに、
hât er iuch mêre in rîters namen,	あなたイーヴァイン様をこれ以上騎士に留めおく
sô liep im triuwe und êre ist.	ことは、王様の恥となることでしょう。」

(3181-9)

このあとルネーテは、王妃の指輪を不誠実な人の手に (an einer ungetriuwen hant, 3195) これ以上はめさせておくわけにはいかないことを口に出して、イーヴァインの手から愛の証であった指輪を取り上げたのであるが、騎士的世界を代表する決定機関としてのアルトゥース宮廷の証人の前で²²⁾ ルネーテによって非難された上、指輪まで抜き取られたイーヴァインは、要するに誓約を破ることによってラウディーネとの結婚のみならず、彼と社会全体との関係をも壊わしてしまつたのであり²³⁾、騎士の最高の徳目の一つである忠誠心 (triuwe) を失い、騎士社会から追放されたも同然なのである。罪 (die schulde, 3222) の意識で狂気となったイーヴァインは、礼儀も作法も忘れて、自分の衣服を引き裂き、すっかり裸となったが、これは宮廷社会からの追放であり、騎士的地位を失ったしるしだと解することができよう²⁴⁾。妻の愛と社会的地位を失ったイーヴァインは今や裸というあわれな姿で荒野をさまようこととなるのである。

II. イーヴァインの六つの冒険 — triuwe と erbarmen と der rîter mitten lewen —

このようにあわれな姿で荒野をさまよう直接の原因となった罪は、勿論ラウディーネとの誓約を破ったことにあると言えよう。その後の彼の放浪生活も、獣と同じように、言語を使用できないという状況に陥ることによってその罪の償いにはふさわしいのである²⁵⁾。彼がそれによって誤ちを犯した言語は今や彼から奪い取られているのであり²⁶⁾、彼はもはや騎士ではなく、獣も同然な存在なのである。森の中で弓を持った一人の若者と出会ったときも、また新しい開墾地で一人の隠者と出会ったときも、この狂人は言葉によってコミュニケーションをはかろうとする試みは全くしていない²⁷⁾。空腹に襲われると、野獣を射殺してそれをそのまま食べたり、射殺した野獣を隠者のところへ持って行ってその代わりとしてパンと水をもらって飢えをしのいでいたの

22) Ebd., S. 73.

23) H. ZUTT: a. a. O., S. 23.

24) Vgl. ebd., S. 60-61.

25) Vgl. ebd., S. 62.

26) Ebd.

27) Ebd., S. 61.

ため、アーリエルス伯の軍はわずかな兵士となって後退せざるを得ない。近くの城に逃げ出すと、イーヴァインはアーリエルス伯を追いかけて捕虜として連れ戻す。こうして戦いはイーヴァインの誉れとなって終わったが、この第一の冒険はかつての泉の冒険の場合とは性格が異なっていることが明らかである。イーヴァインは今や防衛者の役割を果たしているのであって、以前のような不法な攻撃者ではない³²⁾。しかもアーリエルス伯を以前のアスカロン王のときのように殺しはしない。捕えるだけである。さらに勝利を取めたイーヴァインは、かつてのラウディーネのように、その女主人から求婚されるが、それを拒否してしまう。それでもってラウディーネに対する真心 (triuwe) を守ったと認められよう。イーヴァインは贖罪としての冒険の旅を続けるのである。

こうしてイーヴァインはナリゾーンの婦人たちに別れを告げて馬に乗って進んでいると、龍とライオンが激しく戦っているところに出くわすが、龍は強く大きく、口からは火を吐き出していたので、その熱と悪臭のために、ライオンは非常に大きな声で吠えていた。イーヴァインはどちらを助けたものかと思ひ迷ったが、気高いライオンを助けようと決心して、馬から降りると、龍を目掛けて走り寄り、たちまち龍を打ち殺して、ライオンを窮地から救い出した。この戦いが第二の冒険である。しかし彼は龍を打ち殺したあとも、ライオンが彼に襲いかかってくるのではないかと心配したが、ライオンは彼の足許に身をすり寄せ、動物にできうる限りの愛着を示したのである。ライオンは窮地から救い出してもらった恩に対してできる限りの誠実さ (triuwe) を示したと言えよう。以前身隠しの指輪で救い出してもらっていながらそのルネーテの恩を裏切ることとなったイーヴァインのように不実 (ungetriuwe) とはならなかったのである。従って、ライオンは誠実の象徴であり³³⁾、イーヴァインにとってはかつての罪に対する警告でもある³⁴⁾ と言えよう。以後このライオンはイーヴァインを主人として従い、イーヴァインは名のらずに「ライオンを連れた騎士」(der riter mittem lewen) と呼ばれることになるのであるが、どこにおいても彼のために尽くすこのライオンの誠実さ (triuwe) によって彼は心を浄化されて内面的に成長することとなるのである。

こうしてイーヴァインが次に体験することとなる第三と第四の冒険は、約束の期限を破ったかつてのイーヴァインの不実の罪に対する試練の決闘であるとも言えよう。まず彼はライオンと共に旅を続けるうち、運命の手に導びかれて、愛する妻ラウディーネの国へとやって来て (3923-5)、自らの罪に心を痛める。この罪の意識はこの場でこのあとライオンの誠実さ (triuwe) に触れることによってさらに深まることとなる。すなわち、妻の国へやって来て大変悲しくなったイーヴァインは、悲嘆のあまり心の力を失って、馬から地面に倒れ落ちたとき、剣が鞘走って、彼の甲冑を貫いて突き刺ったのであるが、流れ出る血を見て主人が死んだものと思ったライオン

32) Th. CRAMER: a. a. O., S. 39.

33) P. WAPNEWSKI: a. a. O., S. 77.

34) Vgl. H. ZUTT: a. a. O., S. 69.

は自分も腹を刺して死のうとしたのである。そのとき身を起こしてその行為を中止させたイーヴァインは、このライオンの真の誠実さ (rehtiu triuwe, 4005) に心打たれて、かつての自分がいかに不実 (ungetriuwe) であったかをしかと悟り、こう言って嘆くのである。

'unsælec man, wie verstû nû!
der unsæligest bistû
der ie zer werlte wart geborn.
nû wie hâstû verlorn
dîner vrouwen hulde!

...

(3961-5)

ich mac wol clagen mîn schoene wip:
war umbe spar ich den lip?
mîn lip wære des wol wert
daz mich mîn selbes swert
zehant hie an im ræche,
und ez durch in stæche.
sît ich mirz selbe hân getân,
ich solts ouch selbe buoze enpfân
(nû gît mir doch des bilde
dirre lewe wilde,
daz er von herzeleide sich
wolde erstechen umbe mich,
daz *rehtiu triuwe* nâhen gât);
sît mir mîn selbes missetât,
mîner vrouwen hulde,
unde dehein ir schulde,
ân aller slahte nôt verlôs,
und weinen vür daz lachen kôs.'

(3993-4010)

「不幸な男よ、今お前は何たる有様か。
この世に生まれた者の中で
お前は最も不幸者だ。
ああ、お前は どうして
愛しい女性の愛を失ってしまったのか。

...

私が美しい妻のことを嘆くのも当然だ。
なぜ私はこの命を大事に守っているのか。
私の身体は、
私自身の剣で
ただちにここで仇を討たれ、
剣で刺し貫かれるのがふさわしいだろうに。
私は自分で自分にあんなことをしたのだから、
自分でもその贖いをすべきなのだ。
(今、この野性のライオンが、
私のために心から悲しんで
自らの身を刺して死のうとして、
本当の誠実さとは何なのか、
その見本を私に示してくれたではないか。)
決して妻の所為ではなく、
私自身の誤ちのために、
私は失わずに済むはずの、
愛しい女性の愛を失い、
笑いを涙に取り代えてしまったのだ。」

この嘆きをまさにあのルネーテが聞いていて、ここで二人は再会するのであるが、ルネーテは、イーヴァインの裏切りのために不実とされ、翌日の昼には死刑に処せられる (4040-1) という恐ろしい苦難に遭っていた。イーヴァインの過失 (missetât, 4006) はルネーテの身にも影響を及ぼしていた (vgl. 3184-6) のである。ライオンが示してくれた誠実さ (triuwe, 4005) を、今やライオンを連れた騎士 (der rîter mittem lewen) イーヴァインはルネーテに対して示すことを決心するのである。

'deiswâr ich wil iuch troesten wol,
wan ichz ouch bewaren sol.
ir hât sô vil durch mich getân:

「本当に私はあなたを安心させてあげます。
私の方も是非そうしなくてはならないからです。
あなたは私にあれほど尽くしてくれたのですから、

ob ich deheine triuwe hân,	私にもし何らかの誠実があれば、
sone sol ich daz niht gerne sehen	私が防ぐことのできるところで、
daz iu dehein schade mac geschehen	あなたの身に危害が加えられるのを
dâ ichz kan erwenden.’ (4339-45)	黙って見ているわけにはいきません。」

イーヴァインはすなわち、ルネーテを訴えた内膳頭とその兄弟ら三名と翌日の昼決闘して彼女を救い出すという約束をする (geloben, 4755; 4794) のである。この決闘が第四の冒険であるが、この約束は、それを果たす前に体験することとなる第三の冒険において彼の行動を時間的に制限することとなる。すなわち、ルネーテと約束したその日の夜宿泊を求めた城で、城主——その妻がイーヴァインの親友ガーヴァインの姉である——より悲惨な事情 (4456-506) を聞いて大変あわれに思った (erbarmen, 4740) イーヴァインは、翌朝ハルピーンという名の巨人と戦って城を窮地から救い出すことを約束する (geloben, 4776) のであるが、ただし昼にはルネーテとの約束の場所に行くことができるように巨人が朝早く姿を現わすならば (4742-57) という条件つきでのみ援助を約束することができるのである。ところが、夜が明けて巨人ハルピーンを待ち受けるが、なかなか現われないので、イーヴァインは二つの約束の板挟みにはさまれることになる。悲しみに真っ青になった城主らは彼の親友ガーヴァインの名にかけて哀願するだけに、イーヴァインはますます苦境に陥ることとなる。

‘sus enweiz ich mîn deheinen rât.	「私はもうどうしてよいか分からない。
ich bin, als ez mir nû stât,	事情が今のままなら、
gunêret ob ich rîte	私は去っても名誉を失うし、
und geschendet ob ich bîte.	留まっても恥辱を受ける。
nune mag ichs beidiu niht bestân	私は二つの戦いを同時に果たせないし、
und getar doch ir dewederz lân.	かと言って、そのどちらかを放棄することもできない。
nû gebe mir got guoten rât,	私をここまでお導き下さった神様、
der mich unz her geleitet hât,	私がどちらに対しても
daz ich mich beidenthalp bewar	義務を果たすことができますよう、
sô daz ich rehte gevar.’ (4883-92)	良い助言をお与え下さい。」

イーヴァインはこの二つの決闘の約束を名誉にかけて破るわけにはいかない。ルネーテはその苦悩をただ彼の所為で受けており、しかも二度までもルネーテに対して不実を行なうわけにはいかないのであり、一方その城主の妻の弟ガーヴァインには友としての恩義があるのである。なるほどイーヴァインはこの城主に約束する際に、巨人が朝早く来て昼にはルネーテとの約束の場所へ行くことができるならばという条件を二度 (4742-59; 4793-802) にまでわたって述べているけれども、しかしイーヴァインは城主たちを見捨てるわけにはいかない。イーヴァインはこの二つの約束のうち一つでも守ることができなければ、またもや忠誠心 (triuwe) の欠如の証明として非難される³⁵⁾ ことは必至なのである。従って、イーヴァインの名誉 (êre) が危険に晒されている

35) Ebd., S. 57.

のは、騎士の戦いとの関係においてではなく、彼の約束行為のゆえである³⁶⁾。かつての罪が誓いを破ったことにあったのであるから、イーヴァインにとってこのたびの約束の義務は、何としても取り消すことはできない。約束を破ることはもはや二度と繰り返すことはできないのである。イーヴァインはこうして二つの義務の板挟みにはさまれて迷うのであったが、しかし誠実さ (triuwe) とあわれみの心 (erbarmen) を持って困窮した人々のために援助の約束をしたイーヴァインには今や神の恵みがあったと言えよう。イーヴァインの待っていた巨人はついに姿を見せ、彼の迷いや嘆きは取り除かれたからである。彼はすばやく戦いの用意を整え、巨人目がけて突進して行った。二人の間には激しい戦いが繰り広げられるが、ライオンの助けもあって、イーヴァインはついに剣で巨人の心臓のあるあたりを刺し貫くと、巨人は倒れて戦いは終わった。城の人々はみな喜び、城主は彼に休息を提供したが、イーヴァインはすぐに暇乞いをした。ルネーテとの約束を守って誠実さ (triuwe) を示さなければならなかったからである。

イーヴァインは急いで約束の場所に着くと、時刻はもう昼だったので、ルネーテはすでに引き出されていて、処刑寸前であった。ルネーテは跪いて祈り、もはや命はないものと諦めたとき、ちょうど救い手のイーヴァインが現われたのである。イーヴァインは時刻に関する最初の試練に見事に打ち克つことができたのである。こうしてイーヴァインは内膳頭ら三名との激しい戦いを、しかも愛しいラウディーネの面前で、展開させたわけであるが、神とルネーテの無実が暴力を許さないのだから戦いは彼の負けにはならないこととライオンの手助けがあるという二つのことを確信していたイーヴァインは、なるほどいくつかの傷を負いはしたが、しかしその確信通りついに三人を倒すことができたのである。ルネーテは非常に喜んだ。罪もなしに苦しい目に遭ってきた彼女は、王妃の寵愛を取り戻したからである。ルネーテのほかには名を明かさなかったイーヴァインは、ラウディーネに傷の治るまで彼女のもとに留まるよう懇願される (5459-64) が、愛しい人の愛を取り戻すまでは安らぎも喜びもない (5466-9) ことを告げて悲しくもそこを立ち去る。今や王妃によって神の恵みに委ねられた (5534-40) イーヴァインは、最後の難関へと進み、ラウディーネの国だけではなく、アルトゥース宮廷でも真の騎士たることを実証しなければならないのである。

その最後の難関とは、勿論アルトゥース王の面前で行なわれる親友ガーヴァインとの対決である。それは要するにシュヴァルツ・ドルン伯の他界に伴なって二人姉妹の間に生じた遺産相続をめぐる決闘であった。悪賢い姉は妹より先にアルトゥース宮廷へ行ってガーヴァインを味方につけていた (5666-9) が、しかしそれを誰にも話さないという条件つきであった (5676-7)。そこでイーヴァインは途方に暮れている妹の方の助力をする約束をし (6062-72)、ここについてイーヴァインとガーヴァインがお互いを知ることもなく、アルトゥース王の面前で相争うことになったのである。しかし、この最も困難な決闘の前に——ちょうど第三と第四の冒険のときと同

36) Vgl. ebd.

じような構成になっており——イーヴァインはまたもや巨人、しかし今度は二人の悪魔の巨人と戦わねばならない。これが第五の冒険である。すなわち、ガーヴァインとの決闘の約束をした日の晩彼が宿泊した城で、彼は三百名の女性たちが人質として惨めな生活を強いられているのを見て (6190-3) かわいそうに思った (erbarmen, 6407) のであるが、その婦人たちを解放するための戦いがそれである。翌朝イーヴァインはその二人の巨人と戦うが、このときにもライオンの助けがあって、二人の巨人を打ち倒すことができ、三百名の女性たちを解放することができた。その城主は自分の娘と国とを差し出す (6800-1)。その娘は大変美しい乙女ではあった (vgl. 6504-16) が、イーヴァインはそれを拒否し、ある女性以外の夫にはならないこと (6802-11) を口にする。ここでもラウディーネへの真心 (triuwe) を守っていると考えることができよう。

イーヴァインはぐずぐずしてはいられなかった。第六の冒険としてガーヴァインとの決闘の時刻が近づきつつあったからである。イーヴァインは——このときはライオンは途中で残してきた——何とか遅れずにアルトゥース宮廷に現われた (6900-1)。時刻に関する二度目の試練をも克服したのである。ガーヴァインはすでに来ていたが、両者とも武具を身につけていたため二人とも相手が誰だか分からない。この決闘ほどイーヴァインにとって困難なものはない。ライオンの助けがないからではなく、勝っても負けても彼は名誉 (ere) を失うことになるからである。このときのことをハルトマンはこう語っている。

Diu unkünde was diu want
 diu ir herze underbant,
 daz sî gevriunt von herzen sint,
 und machets mit sehenden ougen blint.
 sî wil daz ein geselle
 den anderen velle:
 und swennern überwindet
 und dâ nâch bevindet
 wen er hât überwunden,
 sone mac er von den stunden
 niemer mêre werden vrô.
 der Wunsch vluochet im alsô:
 im gebrist des leides niht,
 swenn im daz liebest geschicht.
 wan sweder ir den sige kôs,
 der wart mit sige sigelôs.
 in hât unsælec getân
 aller sîner sælden wân:
 er hazzet daz er minnet,
 und verliuset sô er gewinnet. (7055-74)

彼は心からの友人であるということを
 知らないという事実こそが、
 彼らの心を切り分けている壁であり、
 目の見える彼らを盲にしているものであった。
 この知らないことが、友人同志
 殺し合うことを要求するのである。
 そして一方が他方を打ち負かし、
 そのあとで誰を負かしたのかを
 知るならば、
 その者はその時から
 もはや幸福にはなれない。
 望みが彼には呪いとなる。
 彼に最も良いことが起こるときにも、
 彼から苦しみは少しもなくなるならない。
 彼らのうちの一方が勝利を得たにしても、
 彼は勝利で敗れたのだ。
 彼の幸福への期待が
 彼を不幸にしたのだ。
 彼は自分の愛するものを惜み、
 彼は勝っても負けたことになるのだ。

これまでの冒険で最大の難関であると言えよう。しかし、これまでの冒険で困窮した人々を助けるというあわれみ (erbarmen) の道を歩んで来たイーヴァインには、先の場合と同じように神の恵みがあったと言ってもよいであろう。朝に始まった決闘は、昼を過ぎてても夕方となっても決着がつかないのである。翌日まで決着が延期されて休戦となった (7356-7) とき、両者は初めて言葉进行を交わすことになるが、この場合にも言語が重要な役割を演じていて、この二人の対話によって二人の名誉は維持されることになるのである。対話の口火を切ったのはイーヴァインである。

er sprach 'wir haben eht verlân
unser hâzlichez spil:
ich mac nû sprechen swaz ich wil.

(7378-80)

ich minnet unz an dise vrist
den tac vûr allez dazder ist:
deiswâr, edel rîter guot,
nû habet ir den selben muot
vil gar an mir verkêret.
der tac sî gunêret:
ich hazz in iemer mêre,
wand er mir alle mîn êre
vil nâch hæte benomen.

(7391-9)

und wizzet daz ich nie gewan
ze tuonne mit deheinem man
den ich sô gerne erkande.
ir möhtent âne schande
mir wol sagen iuvern namen.'

(7425-9)

彼は言った。「我々は
敵意のある戦いを止めました。
今や私は私の欲することが話せます。

...

私はこの時まで
昼が一番好きでした。
しかし実のところ、高貴で立派な騎士よ、
今や君は私にこの考えを
全く変えさせてしまったのだ。
昼の名誉がなくなるように。
私はこれから昼を憎みます。
というのも昼が私の名誉をほとんど
奪ってしまうところだったのでから。

...

私がこんなに知りたがっている人と
相対したことは決してなかったことを、
知ってくれ給え。
君の名を明かしてくれても
君の恥辱にはならないであろう。」

名前を名のすることは普通敗北の自白である³⁷⁾が、この二人の場合にはそれはあてはまらない。今や問題は決闘ではなく、相手が誰であるのかをお互いが知りたいのである。二人が同じ意見であることは、すぐさまガーヴァインが答える言葉からも明らかである。

'ichn wil mich wider iuch niht
sprach mîn her Gâwein, [schamen,]
'wir gehellen beide in ein.
herre, ir habent mich des verdigen:
unde hetent ir geswigen,
die rede die ir habent getân

「君になら、私の名を告げても恥にはなるまい。」
とガーヴァインは答えた。
「我々の意見は一致しています。
騎士よ、君の方が先でした。
もし君が黙っていたら、
君の言った言葉を

37) Ebd., S. 50.

die wold ich gesprochen hân.	私が言っていたことでしょう。
daz ir dâ minnet, daz minn ich:	君が愛するものを私も愛し、
des ir dâ sorget, des sorg ich.	君が恐れているものを私も恐れています。
...	...
mir benam deiswâr nie mêre	本当に、一人の騎士が
ein man alsô sêre	こんなに私の防御力を
mîne werliche maht:	奪ったことは今までにありませんでした。
und möhtet ir vor der naht	もし夜が訪れる前に君が
ze zwein slegen hân gesehen,	もう二回斬りつける機会を見い出していたら、
sô müese ich iu des siges jehen.	私は君に勝利を認めねばならなかったでしょう。
...	...
ich wil iu mînen namen sagen.	私は君に私の名前を名のりましょう。
ich bin genant Gâwein.' (7470-1)	私の名はガーヴァインです。」

ガーヴァインが今やイーヴァインと同じことを言っているということは、単なる繰り返しではなく、ガーヴァインとイーヴァインは騎士行為の点において同じ価値ある存在であるばかりではなく、基準と義務に対する彼らの心構えも同一であるということのしるしなのである³⁸⁾。それについての理解もただ話すことによってのみ可能となったのである³⁹⁾。こうして言葉を交わすことによってイーヴァインとガーヴァインはお互い相手が誰であったのかを知ったのであり、このあと二人が自分の名誉 (pris) を称え合っている光景はアルトゥース王に大変喜ばれる (7643-7) こととなり、そこでその遺産相続問題は全てアルトゥース王の判断に委ねられる (7656) こととなるのである。そしてそのあとアルトゥース王の巧みな裁き方によって円満に解決することとなるわけであるが、その際にも大きな役割を演じているのが、この作品のモチーフとも言うべき言語の発話行為である。この二人姉妹の遺産相続問題の解決場面を詩人ハルトマンはこのように語っているのである。

Diu rede wart im bevolhen gar.	その問題は王様に任された。
die juncvrouwen lâter dar.	王様は乙女たちを呼び寄せて、
er sprach 'wâ ist nû diu maget	言った。「父が二人に残した
diu ir swester hât versaget	土地と財産とを
niuwan durch ir übermuot	傲慢さから
ir erbeteil unt taz guot	妹に渡すことを拒否した乙女は、
daz in ir vater beiden lie?'	どこに居るのか。」
dô sprach sî gâhes 'ich bin hie.'	すると姉はすぐ言った。「私はここにいます。」
dô sî sich alsus versprach	彼女が釣り込まれて
und unrehtes selbe jach,	自分が悪いことを認めたとき、
des wart Artûs der künec vrô:	アルトゥース王は喜んだ。

38) Ebd., S. 52.

39) Ebd.

ze geziuge zôch ers alle dô.
 er sprach 'vrouwe, ir hânt verjehen.
 daz ist vor sô vil diet geschehen
 daz irs niht wider muget komen:
 und daz ir ir habet genomen,
 daz müezet ir ir wider geben,
 welt ir nâch gerichte leben.' (7653-70)

王はみんなを証人として呼んで、
 言った。「姫よ、あなたは自白しました。
 こんなに多くの人の前での自白だから、
 あなたはそれを撤回することはできません。
 もしあなたが判決に従おうとするなら、
 あなたは妹から取り上げたものを
 妹に返さなければなりません。」

この場面が王妃誘拐の挿話を想起させることは明白である。ここで言えるのは、誓いの言葉ではないにしても、一度口に出した言葉は誓いに等しいということである。なるほど姉娘はこのあと容易に口をすべらせたことを持ち出してアルトゥース王に抵抗しようとするが、事態はさらに姉娘の立場からすれば不利となるばかりなので、ついにその悪賢い姉もアルトゥース王の判断に従うことになるのである。こうしてアルトゥース王の巧みな裁きで問題が解決したところへ、ライオンが姿を現わし、それでもってイーヴァインが「ライオンを連れた有名な騎士」(der degen mære mittem lewen, 7741-2)であったことが明らかとなり、その姉の城を窮地より救い出してもらっていたガーヴァインとその救い主イーヴァインとの間の友情がますます深まったことは勿論のことである。今までの冒険で名前は明らかにせずに「ライオンを連れた騎士」(der riter mittem lewen) とだけ名のっていたイーヴァインは、この最後の冒険で初めてイーヴァインと名のることのできる真の騎士となったのである。以上のように見てくると、この作品の中では言語の発話行為というものがいかに重要な役割を演じているかが明らかであろう。言語の発話行為の中でも特に「誓い」のモチーフによってアルトゥース王とイーヴァインはお互い結びつけられているのである⁴⁰⁾。

III. イーヴァインとラウディーネの和解 ——eit と suone——

「誓い」のモチーフはこうしてアルトゥース王とイーヴァインを結びつけているばかりではなく、さらにイーヴァインとラウディーネとの不和を解くいわば「鍵」でもある⁴¹⁾ のである。作品の最後に位置しているこの二人の和解 (suone) は、それによって物語が完結するほど重要なものであって、決して付加的結末ではない。ガーヴァインとの決闘後なおも妻ラウディーネへの愛に悩まされていたイーヴァインがこっそりとライオンを連れて再度泉の国へと出かけて行ったのも、最初の泉の国への冒険と対を成すものなのである。こうして泉の国への冒険が再度行なわれ、侵入者によって悪天候となって、再度この泉の国が危険に晒されたとき、ルネーテは以前と同じように王妃ラウディーネに進言することになるわけであるが、この場合が以前と異なるのは、今回は特に王妃の方からルネーテに最善の策を教えてくれるようにと頼んでいるということである。王妃から最善の忠告を求められたルネーテは、こう言って進言するのである。

40) Ebd., S. 24 u. 28.

41) Vgl. ebd. S. 29.

sî sprach 'der danne weste
den rîter der den risen sluoc
und der mich lasters übertruoc,
daz er mich von dem rôste
hie vor iu erlôste,
der iu den selben suochte,
ob er ze komenne ruochte,
sone wærez niender baz bewant.
doch ist mir ein dinc wol erkant:
ezn hulfe niemannes list,
unz im sin vrouwe ungnædec ist,
daz er vüere durch in
weder her ode hin,
ern tæte im danne sicherheit
daz er nâch rehter arbeit
mit allen sînen dîngen
dâ nâch hulfe ringen,
ob er durch iu iht tæte,
daz er wider hæte
sîner vrouwen minne.' (7868-87)

彼女は言った。「あの巨人を打ち殺し、
またこのあなたの目の前で
私を薪の山から救い出して
恥辱から守ってくれたあの騎士を、
もし知っている人があれば、
その人があの騎士を捜し、
ここへ来て下さるように仕向ければ、
それにまさる方策はございません。
しかし私は一つのことをよく存じています。
あの騎士の貴婦人が彼に好意を示さない限り、
誰が説得しても、
あの騎士は
どこへも出かけはしないでしょう。
つまり、あの騎士に援助をお願いするならば、
あの騎士がその貴婦人の愛を
取り戻せるように、
誠実な努力と
全財産を傾けて
尽くすことを
あの騎士に約束しなければなりません。」

以前と同じようにこの泉の国を護るためには勇敢な騎士の援助が必要だということのルネーテの進言は、以前のそれと対を成していることが明らかである。これに対して王妃は、神から授かった知恵と命と財産の全てを傾けてその騎士のためにその貴婦人の怒りを解くよう努力することをルネーテに対して握手による誓約 (hantslac, 7894) をするのであるが、この場合にはとりわけ明確な言葉 (stæter rede, 7918) による誓いが重要であるということは、ルネーテが王妃に誓いを促している次の言葉からも明白である。

sî sprach 'vrouwe, ich muoz bewarn
mit selhen wîzen den eit
daz mich deheiner valscheit
iemen zîhe dar an.
er ist ein harte stæter man
nâch dem ich dâ rîten sol,
und bedarf dâ stæter rede wol.
welt ir nâch im senden,
diu wort mit werken enden
der ich zem eide niht enbir,
sô sprechet, vrouwe, nâch mir.' (7912-22)

彼女は言った。「王妃様、私は
裏切りの罪に
問われるようなことになりませんように、
慎重に誓いの言葉を考えなくてはなりません。
私がこれから探しに参ります騎士は、
ことのほか几帳面な方でございますから、
明確な言葉が必要なのです。
あの騎士にお迎えを出され、
あなたのお言葉を確実に実行なさるおつもりでしたら、
私はあなたに誓っていただかねばなりません。
さあ、王妃様、私の言う通りに言って下さい。」

以前ルネーテが裏切りの罪に問われた出来事がこの言葉の中にほのめかされていると考えてもよいであろう。ルネーテが再び罪に陥らないためには、今や王妃の明確な言葉による誓約が必要なのである。ルネーテの考え出した誓いの文句に従って、王妃ラウディーネは聖櫃の上に指を置いて次のように誓いを立てたのである。

<p>'Ob der riter her kumt und mir ze mîner nôt gevrumt, mit tem der lewe varend ist, daz ich ân allen argen list mîne maht und mînen sin dar an kêrende bin daz ich im wider gewinne sîner vrouwen minne. ich bite mir got helfen sô daz ich iemer werde vrô, und dise guote heiligen.'</p>	<p>(7925-35)</p>	<p>「ライオンを連れてくる騎士が ここにやって来て、 私をこの苦難から救ってくれるならば、 私はいかなる悪巧みも持たずに 私の力と知力とを 尽くして、 その騎士が貴婦人の愛を 取り戻すことができるよう、努力します。 神様とここにおいでのご敬虔な聖人さまに、 私がいつまでも幸せでいられますよう、 お力をお貸し下さることをお願い致します。」</p>
---	------------------	--

こうしてルネーテが連れて来ようとしている騎士に必要なことは全て述べられたので、彼女はいそいそと出かけて行った。彼が今どこにいるのか分からなかったが、神の恵みによって、ルネーテはイーヴァインを泉のところで見つけることができた。ルネーテの賢明な取り計らいを聞いてイーヴァインが喜んだのも当然のことである。二人はすぐさま城へと入って王妃ラウディーネに直面するが、ここで重要な役割を演じているのは勿論「誓い」である。ルネーテが王妃に誓いを果たすよう促した(8069-70)あと、この騎士が実はイーヴァインであることを明かすと、王妃はルネーテの悪巧みにひどく騙された気になるが、誓いをした以上それを取り消すことはできずに、こう言うのである。

<p>'und sage dir mitter wârheit, entwunge michs niht der eit, sô wærez unergangen. der eit hât mich gevangen: der zorn ist mînhalp dâ hin. gedienen müez ich noch umb in daz er mich lieber welle hân danner mich noch habe getân.'</p>	<p>(8089-96)</p>	<p>「真実にかけて断言しますが、 誓いに縛られないなら、 仲直りなどとんでもない話です。 しかし誓いが私を捕えています。 それで私は怒りをなくしたいのです。 彼が私を以前よりも もっと愛してくれるように なってほしいものです。」</p>
---	------------------	---

事態が彼に幸いな結果となり、彼の苦しみが終わることとなるのを聞いたとき、イーヴァインは自らの罪を反省しながら二度と罪を繰り返さないことを誓ってこう言うのである。

'vrouwe, ich hân missetân: zewâre daz riuwet mich. ouch ist daz gewonlich daz man dem sündigen man, swie swære schulde er ie gewan, nâch riuwen sünde vergebe, und daz er in der buoze lebe daz erz niemer mê getuo. nune hoeret anders niht dâ zuo: wan kum ich nû ze hulden, sine wirt von mînen schulden niemer mêre verlorn.' (8102-13)	「妃よ、私は誤ちを犯しました。 本当にそれを後悔しています。 しかし、罪を犯した者は、 たといどんな重い罪を犯しても、 悔い改めれば罪を赦され、 二度とその罪を犯さないよう 贖いをするのが 世の慣わしです。 よくお聞き下さい。 私も今あなたの好意が得られれば、 今後は決して私の落度によって それを失わないようにするつもりです。」
--	--

「グレゴリーウス」の言葉(43-50; 2698-2706; 3983-8)を想起させるこのイーヴァインの言葉に対して、ラウディーネはもう一度誓いの効力を強調してこう言う。

sî sprach 'ich hân es gesworn: ez wære mir lieb ode leit, daz ich mîner gewarheit iht wider komen kunde.' (8114-7)	彼女は言った。「私はそうしてあげてを誓いました。それが私に好ましかろうと厭わしかろうと、私は誓約を取り消すことはできません。」
---	---

ここで王妃ラウディーネは、アルトゥース王妃誘拐の際のアルトゥース王とちょうど同じ態度を取り入れているのである⁴²⁾。この作品の中では誓約がいかに絶対的な効力を持つかがこの和解の場面でも窺うことができるのである。この誓いによって王妃とイーヴァインの心は打ち解け、お互いにこれまでの仕打ちを許してくれるよう頼み合うと、仲違いはすっかりなくなったのである。ルネーテも二人の和解を見て、心が和んだ。こうして二人は今後多くの幸福な日々を過ごすことが期待されたのである。

結 び

以上のように見えてくると、作品全体は誓いのモチーフによって貫かれていることが明らかである。誓いのモチーフによってアルトゥース王とイーヴァインが結びついているばかりではなく、イーヴァインとラウディーネの不和を解く鍵もこの誓いの行為なのであって、この作品の中で誓いのモチーフの果たす役割がいかに重要であるかは自ずと明らかであろう。このようにこの作品の中で特にアルトゥース王の誓いの役割が重要な位置を占めていることから言えるのは、アルトゥース王は宮廷騎士社会の規範であり、イーヴァインの目指しているものはアルトゥース宮廷社会の理想の騎士像であるということである。

42) Ebd., S. 28.

ところが、カーログレナントの失敗談を聞いて出かけて行ったイーヴァインの泉の冒険は、理想的なアルトゥース騎士の「冒険」(âventiure) の概念規定に属している本質的な要素を欠いている⁴³⁾ と言わなければならない。この泉の冒険での彼の行動は、六つの冒険と比較してみても明らかのように、ことごとく理想的騎士にふさわしいものではないからである。もともとその冒険が不法な性格のものとなったのも、結局はカーログレナントの失敗談をイーヴァインが正しく理解しなかったことにその原因があると言えよう。従って、この作品の最初に語られているカーログレナントの失敗談は、イーヴァインが騎士として未熟であり無知であったことを暴露することにも役立っているのである。カーログレナントが泉の国へ行って、アスカローン王と対峙したとき、アスカローン王が言った言葉は、この作品の解釈のためには特に注目されねばならないであろう。

‘rfter, ir sît triuwelôs.
 mirn wart von iu niht widerseit,
 und habent mir lasterlicheit leit
 in iuwer hôchwart getân.
 nu wie sihe ich mînen walt stân!
 den habent ir mir verderbet
 und mîn wilt ersterbet
 und mîn gevüegele verjaget.
 iu sî von mir widersaget:
 ir sult es mir ze buoze stân
 od ez muoz mir an den lîp gân.
 daz kint daz dâ ist geslagen,
 daz muoz wol weinen unde clagen:
 alsus clag ich von schulden.
 ichn hân wider iuwers hulden
 mit mînem wizzen niht getân:
 âne schulde ich grôzen schaden hân.
 hien sol niht vrides mêre wesen:
 wert iuch, ob ir welt genesen.’

「騎士よ、君は不実な人だ。
 私は君から宣戦の通知を受けていないし、
 君は傲慢な行為によって
 私にひどい苦しみを与えた。
 私のこの森の有様はどうだ。
 君はこの森を荒らし、
 私の獵獣を殺し、
 私の鳥を追い払ってしまったのだ。
 私は君に宣戦することにしよう。
 君が私にこの償いをするか、
 それとも私自身が命を失うかだ。
 なぐられた子供は
 泣いて苦痛を訴えるものだ。
 だから私が嘆くのも当然だろう。
 私は、君の好意を
 そこなうようなことをした覚えがない。
 罪もないのに私はひどい損害を受けたわけだ。
 ここにはもう和平の余地はない。
 命が惜しかったら、身を守り給え。」

(712-30)

泉の国の城主のこの言葉を理解することもなく、イーヴァインは挑戦を通達することもなく⁴⁴⁾、ただ傲慢に利己的な名誉 (êre) を求めて出かけて行ったのであり、不思議な石に水を注ぐという行為によって不法にもその国の秩序を乱しているとも言えるのである。嵐がおさまって城から出て来たアスカローン王との決闘でも、イーヴァインは重傷を負って逃げるアスカローン王を「騎士の心得も忘れて」(âne zuht, 1056) 追いかけて無慈悲に殺害したばかりか、さらにその国を護

43) Th. CRAMER: a. a. O., S. 34.

44) 騎士と戦う場合には三日前に宣戦の通告をしなければならないのである。(Vgl. ebd., S. 35. また、郁文堂刊「ハルトマン作品集」275頁の註を参照のこと。)

るために夫の殺害者と結婚する決心をした善良な王妃ラウディーネの次のような期待を裏切ることにもなるからである。

'ob ez anders umb in stât	「もし彼が、本当に
alsô rehte und alsô wol	私が許してもよいほど
daz ich im mîn gunnen sol,	正しく良い人ならば、
sô muoz er mich mit triuwen	彼は誠実に
ergetzen mîner riuwen,	私の悲しみを償ってくれて、
und muoz mich deste baz hân	私を辛い目に会わせた分だけ
daz er mir leide hât getân.' (2066-72)	一層幸福にしてくれるに違いないわ。」

イーヴァインは、アスカロン王を殺害してラウディーネに与えた悲しみ (riuwen, 2070) を誠実に (mit triuwen, 2069) 償う (ergetzen, 2070) べきであるのに、結婚してのちすぐさま王妃との誓約をないがしろにする (gelübete versaz, 3056) ことによって不誠実な裏切り者となるのである。従って、イーヴァインの罪は、より詳細に言えば、彼がラウディーネの国に出かけて行ってその夫アスカロン王を無慈悲に殺害し、その国の秩序を乱したばかりか、力づくで一人の女性とその国を手中に収めた上、さらにその女性を裏切ったということの中にあっただけと言え、一言で言えば、「誠実と憐憫の情」(triuwe und erbermde) の欠如⁴⁵⁾ にあっただけと言えよう。そのため贖罪の旅として続ける彼の六つの冒険では不誠実で無慈悲な過去の自分に打ち克たなければならない。その意味で六つの冒険は過去の自分との戦いであるとも言えよう。

従って、イーヴァインがその後体験する六つの冒険は、かつての泉の冒険とは根本的に逆の道を行くものであり⁴⁶⁾、アルトゥース宮廷騎士にふさわしい行為であるとも言えよう。その六つの冒険については上で詳しく述べたわけであるが、ここで六つの冒険に共通して言えることは、例外なく困窮した者たちの解放の行為であり救済の行為である⁴⁷⁾ ということである。泉の冒険のときとは全く異なって、六つの冒険はいずれの場合においてもイーヴァインは不法な攻撃者ではなく、防衛者の立場にあるのであって、今や真の騎士たるにふさわしい行為をしていると言えるのである。すなわち、第一の冒険で困窮したナリゾーンの婦人たちを救い (erbarmen)、第二の冒険で誠実 (triuwe) の象徴であるライオンを救い出したイーヴァインは、もはや利己的な功名心を求める傲慢な騎士なのではなく、無私の行動をする名もなき「ライオンを連れた騎士」(der rîter mittem lewen) なのであって、のちの第三と第四の冒険でも、またさらに困難なものとなる第五と第六の冒険でも誠実さ (triuwe) とあわれみの心 (erbarmen) とを持ち合わせた真の騎士として困窮した者たちのために決闘を行なっているのである。このように六つの冒険を通してイーヴァインは数々の試練に遭い、それらを克服して不誠実で無慈悲な過去の自分に打ち克つこ

45) Vgl. P. WAPNEWSKI: a. a. O., S. 77.

46) Vgl. Th. CRAMER: a. a. O., S. 44-45.

47) P. WAPNEWSKI: a. a. O., S. 76.

とによって、今やラウディーネの愛を再び得る資格ができたと言えるのである。しかし、誓いを破ることによって失った愛は、誓いによってしか得るすべはない。そこで最後にも重要な役割を演じているのが誓いのモチーフであり、賢明なルネーテの巧みな仲介によって、イーヴァインはラウディーネの明確な言葉による誓いから、彼女の、しかも今度は真実の愛を得ることになったのである。イーヴァインによって窮地から救い出されていた忠実な侍女ルネーテもイーヴァインに対してかつて誓っていた (geloben, 5554; geheizen, 5556) 恩を返したと考えることもできるのである。イーヴァインとルネーテの間にも誓いのモチーフは認められるのであり、ここでも誓いはこの作品を貫く重要なモチーフであることが窮えよう。

このようにラウディーネの愛への道は、誓いを守り (triuwe)、困窮した者たちのため (erbarmen) に戦うという理想的なアルトゥース宮廷騎士の道でもあったのである。言い換えれば、ラウディーネの愛への道 (ミンネ) とアルトゥース宮廷への道 (騎士道) は、二重の道ではなく、一つの道だったのである⁴⁸⁾。こうして誠実さ (triuwe) とあわれみの心 (erbarmen) の行動によって正しい秩序の道を辿りミンネと騎士道の二つを調和させた今のイーヴァインには、神の恵みによってついに長続きする「至福」(sælde) と「名譽」(êre) とが得られたのである。主なる神は慈悲の心を持っている人に至福と名譽 (sælde und êre, 4855) を与えるものなのであって、この作品のプロローグの冒頭でも詩人ハルトマンはこう語っている。

Swer an rehte güete wendet sîn gemüete, dem volget sælde und êre.	真に善なるものに その意を向ける者には、 至福と名譽が与えられる。
	(1-3)

このプロローグにおいてばかりではなく、エピローグにおいても語られている「至福と名譽」(sælde und êre, 8166) を求めて生きる者は、「真の善」(rehte güete, 1)、すなわち、誠実 (triuwe) であり慈悲の心 (erbermde) を持ち合わせた行為を行なわなければならないのである。「哀れなハインリヒ」で内面的に考察された triuwe und erbermde のテーマは、今や「イーヴァイン」において騎士的に形象化されるに至ったのである。このように「イーヴァイン」は、題材はミンネと騎士道の調和という世俗的なものでありながら、宗教的な感情も多量に含まれている作品⁴⁹⁾へと深化させられており、アルトゥース王の誓いのモチーフを整然と作品の中に組み入れながら、理想のアルトゥース騎士像を作り上げているところにこの作品の特質があると言えよう。「エーレク」⁵⁰⁾ですでに示されていた理想の騎士像は、こうして「グレゴorius」⁵¹⁾と「哀れなハイ

48) Vgl. Kurt RUH: Zur Interpretation von Hartmanns ›Iwein‹. (1965) In: Hartmann von Aue (Wege der Forschung Band 359) Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt 1973 S. 424.

49) 相良守峯：前掲書410頁。

50) 拙稿：ハルトマン・フォン・アウエの「エーレク」(徳島大学 教養部 紀要——人文・社会科学——第19巻1984年)を参照のこと。

51) 拙稿：ハルトマン・フォン・アウエの「グレゴorius」(同上紀要第20巻1985年)を参照のこと。

ンリヒ」⁵²⁾ という二つの内面的過程を経て、今や「イーヴァイン」のアルトゥース世界において見事に成し遂げられるに至ったと結論づけることができるのである。 (1985・9・8)

※本稿執筆にあたり、テキストは《G. F. BENECKE und K. LACHMANN (Hrsg.): Hartmann von Aue, Iwein. Neu bearbeitet von Ludwig WOLFF. 7. Ausgabe. Band 1 Text. Walter de Gruyter & Co. Berlin 1968.》を使用し、邦語訳で引用・説明している部分については、赤井慧爾・武市修共訳（神戸女子薬科大学人文研究 2-4号1974-76年）とリンケ珠子訳（「ハルトマン作品集」郁文堂1982年）の二つを参照させて頂いたことを付記しておきます。

52) 批稿：ハルトマン・フォン・アウエの「衰れなハイリヒ」（同上紀要第18巻1983年）を参照のこと。